
1981年 夏 彩

辻風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1981年 夏 彩

【著者名】

N1933M

【作者略】

辻風

【あらすじ】

1981年高校生だった少年少女の物語

きょうもハンバーガー屋さんの前で赤信号を待っていた。

たくさんの制服たちが並んでいた。

うちの制服はシンプルで白いカッターシャツに紺のスカートだけだった。

左腕のところに薄い色で英語で校名が入っていた。
この町では、有名な制服だった。私も中学校の頃からあこがれていた。

さつそつと歩く姉さんたちはかっこよく輝いてみえた。

今年からわたしもその一員となつた。学校は長崎の高台にあり、学校からは長崎の町が一望できた。

信号がすすめを示した。いつものように、大学病院前の電停を目指してすすみはじめた。

浦上川に架かる橋の中央まで進んだところで、制服の男子高校生が二人が目の前に進んできた。

「こんなにちは。僕たちバンドやっているんだけど、今度原楽器でコンサートやるんだ」

背の高い色の黒いひとが声をかけてきた。制服は近くの男子校の生徒だつた。

「音楽に興味ありますか。僕たちはアリスのコピーをやっています。ほかにも3つバンドが出ます」

「私、アリス大好きです。お父さんがよく聞いています。いくらなんですか」

思わず私は反応した。

「本当は、500円なんだけど、今日初めての方なので300円でいいよ」

色が黒い目がくりつとした人が背の高い人をチラッとみて答えた。

「いつですか」

「7月26日。夏休みの最初の日曜日」

「ふうん。友達と行こうと2枚くださー」

小さい赤い財布から600円出した。

色の黒い男の子は赤いチケットを渡しながら

「500円でいいよ。ありがと。きっとみにきてね」

「7月26日だから。レーーとーいうバンドだよ。一番最後に出るか

ら

背の高い男の子も二コ二コしながらこつた。

チケットは手作り感たっぷりだった。

受け取って、また電停をめざした。

男の子たちはほかのうちの制服に声をかけている。

長崎では今高校生バンドがあつい。

どんな演奏をしてくれるのだろう。

もうすぐ5時だというのにまだまだ高く、ヤマハの鳴き声がしていた。

もう梅雨が明け夏が始まろうとしていた。
何かがおおきく変わろうとしているように思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933m/>

1981年 夏 彩

2010年10月21日22時43分発行